

今回はまず、首都マプトから車で3、4時間のところにある、象の保護区を紹介します。ここには650頭の象が住んでいるそうです。保護区の中は車で回ることができますが、観光地化されていないので、広大な自然があるだけで、人間のためのトイレや休憩所はありません。象のほかに、キリン、シマウマ、インパラ、ヌー、等の草食動物がいますが、肉食獣はいないそうです。

この保護区に、日曜日、ボランティア仲間4人で出かけました。モザンビークが20年程前まで内戦をしていた、というのは最初の報告で書きましたが、その時に多くの野生動物が殺されました。象は長生きなので、その時の恐ろしい記憶を今も忘れずにいるそうです。だからこの保護区の象たちはとても人間を警戒しているのだそうです。ここは肉食獣がないので、車から降りてちょっと散歩するのもOKなのですが、もし、象に出会ってしまったら、襲ってくるかもしれないから、へたに動かず、落ち着いてゆっくり移動するように、と注意を受けました。

湧き水の大きな湖があるのには驚きました。カバやワニがいて、水鳥もたくさんいました。象たちも、ここに水を飲みに来るそうです。ただ、この日は曇っていて、前日に雨も降ったので、森の中に十分な水があり、この湖まで出て来る必要がないだろう、ということでした。ここは、象たちにとって十分な食べ物と水があり、肉食獣もない天国かもしれません。人間を恐れる象を、そうとわかっていてわざわざ見に来る人間など、いない方がいいような気がしました。

森の中の道を走っていたら、道の真ん中に小鹿が固まっていた。道を渡り始めてから、車に気づいて固まったようです。車が止まるとしばらくして、よちよち渡っていきました。

象はなかなか見ることができませんでしたが、他の動物たちは姿を見せてくれました。彼らはこちらに気づくと、じーっとこちらを見つめます。こっちが一生懸命見ている以上に、じーっと見つめられる感じです。キリンの家族を近くで見ることができました。彼らは、長い首をさらに伸ばして、興味深げに、いつまでもこっちを見つめていました。



さて、象は見れなくてもいい、と思いながら帰途についたのですが、小さな水飲み場に向かう1頭のオスの象を見ることができました。地平線しか見えないだっ広い平原の真ん中で急に車が止まって、運転手兼ガイドのお兄さんが、じっと窓の外を見ていました。何も見えないと思いましたが、彼が指さす先に、象が1頭、悠々と歩いていました。「俺は奴とここで会う約束してたんだ。」とガイド氏は言って、私たちに笑わせてくれました。



次は、首都とその近郊で活動するボランティアが協力して、日本祭りを行ったので、その報告です。けんだま、名前書き、折り紙の手裏剣、折り紙、日本の絵本読み聞かせ、等々、盛りだくさんのお祭りになりました。ひらがな、カタカナ、漢字で名前を書いてあげると、こちらの人達はとっても喜びます。腕や手のひらに、いっぱい名前を書いてもらって、みんなに見せている子供たちがいっぱいいました。

剣道と居合道のデモンストレーションも好評でした。シニアボランティアのモリヤさんがお弟子さん二人と三人で披露してくれました。剣道の試合のデモでは、気合を入れる掛け声をあげますが、これを初めて聞く子供たちは、みんな笑います。神聖な気合の掛け声を笑うなんて、と日本人は思うかもしれませんが、この叫び声が、なんだか可笑しい、と彼らは思うってしまうのです。それでも、みんな興味深々です。デモの最後に竹刀を持ってやってみたい子を募ると、女の子も手を挙げていました。

お祭りの最後は、JICAボランティアならなぜかみんな踊れるソーラン節です。このソーラン節の前に、子供たちが、民族ダンスを披露してくれました。モザンビークの学校は学芸会や運動会などの行事が全くありません。音楽を教えているJICAボランティアのあつみさんは、この機会に子供たちが練習の成果を見てもらう喜びを感じてくれば、

と言って、日ごろみんなで練習しているピアニカの演奏をここで披露しました。

この日、日本人とふれあった記憶が、子供たちの中にいつまでも残るのではないか、という気がします。私が読んだ絵本のことも、ずっと覚えていてくれるかもしれません。それほど娯楽がないのです。また、みんなで、日本祭りをやれるといいな、と思っています。

